聲文私言　完

イ曾5
64

活堂主人著

聲文私言

翻刻必究

江戸書肆　青藜閣發兌

門 イ 部 5 號 64 巻

聲文私言序

[illegible]

おもしろしとおもふの白香山朱倣庵が
よの詩をよみしるしとてもてはやさるゝ
は同輝庵が芳宗銘が翁などの歌をも
よみてらひとはさるゝやうなるやされどもさひは
てゆけど詩歌語の学のちからをしらぬ
まうちさもありなんや
みな此篇が書をまなべる人は演堂にあそばし
聲文私言やはりもちゐなばいかにもあれの本

永和らぎてひさかたの天つちをもうごかしさ
とられたる学者のともさふることわざのなかの
かゝるてあまたの代々にはひもてきやうなよ
なにゆゑ書紫ふる世にしるしきは
なきやとはしかはある代ものれもよし
いふしまことはよひいかなる詞のいやしく
たゞつゞくなみともいふかしこ
手をとりしるしなむ文政九年十二月

望松庵主人源興清識

男興叙書

聲文私言叙

山河乃海乃あれくまうさとんゆゑむハおのゝ清の
まさりしやもとのまゝく蒼海原の遠き比とくゆきし
廣き浜を新るらし年まで幾年もあれこなたのうら波
まのたびあり学びの道お形しことわざいとくいひゆゑ
彦説乃学びなどもまた此まで清さもと理りし清
きさ流れさまるる以る彦く遠くさかえのとこみ
國史なをしんあるかくことものりさてしぬく
此の世にをきてきあたつ神ハ海原乃

おほよそ賀茂のうしか業をうけて後あらたのをしへ
けふまでもしるしのこしても此百年あまりになりぬ
羽倉氏より後の翁賀茂の大人なとは博士たち
これ梅花集のぬし業出ける志をそへてこゝろをそへ
書をあらはしかたかな附をそへしよりて皇國学の道は
ひらけはじめ新にこのはしめたる昔
西山の中納言の君は唐のふみをはたひろくまなひ
やまとふみをもこよなくすきたまひけいては
詞の海遠くこれ源をあさくせす(?)

乃阿闍梨契沖にはかりて学者をめして(?)
下河辺の長流(?)といふ人をもて安藤為章をはじめて
雲ゐならぬ遠く法華(?)のはじめ…阿闍梨
者の中事あるごとに法…萬葉集
の註釈を
法…のかたのかへしまうし
法館にてあまた博士たちをつとへて
むかし皇國の紀傳のさまなるをつくり
朝廷（ミカト）に聞えあげて後大日本史といふ名を賜はり(?)

此外にも先達の書どもあまた撰ひいだし給へれ
ことはに契おこし給へなきて晒るこの花集
そこしきたまへ仮名学の道の志を著しなる人ゝ
おほしなるうれしみの世にたゝはさる事おほ
もれ悉く掌にしおるなく、此この見て学ひ
このたび斜来その緒つい
此更に漢の御遊行にかゝる大殿年せし
御殿の御意見ひえをさに尊重のこゝろに成人に
たりなれば時のまかれりけるのまた拙き事ども

こよなくおもふの趣をまなふそのすにこ法堂大人また
故あ理しく八と移るそのゝたまにしまと御年年と及て
しまゝに序書をとりまて必ずうつしれまゐらせて父月
夜おもつの此事をも守されむものつくこ数ふる諸集
ぬるゝ八此ほとまうい学を人手にもらく何も詞の事
まうしれる学趣深つい録みて居きのこゝまゝときる
所る一覧の部う文ねたるにゝ押にたるのあるす
新らしとぬくこととくいふ空にまつみおもら
それもらんのをちうて守しるの外よる己にくよらく

江乃まことは海の未見るを残せしもまた海原の
おもひ入れられたるをむねとなれし心ならせしかくのごとく
見る人の学のおやとすなるハ語をはじめてておもひの
しきいかにも辞ハ古辞文とあるや彼のしらべる
情辞の転るとも和文にたがひてしるしと思ふ給
与ふるなるとれざりけるや謙遜の様なるときものハ
いたるところの文あるべき学者と底もの事にふれん
この語の語ハ辞ハ深くあらしくいふべき哉事本
おもしろく校して意趣を世に示し序す也とて

書て申すといへるは世の学ぶところさへまい
かしこの家おほくして今ハ古事記伝おそれる
秋津田のれるのと方語の説斜理とかいへる
ののしまりて語はもうハせし古殿をもしてかり
しきの是は悟りとおもひしかうとも上代の海あなる
このみかさのおかけのみよりさくやとも思しくとはれ
いそこのこいて教ふるとしてこそ新しき古代
すし青藜閣のおもひしけるとてこのみくの
ちなみのし花園にしるす文政九年……

としの十二月[illegible]白睦堂に[illegible]

友人

江戸 江口[illegible]

聲文私言

水戸 吉田令世述

近き年比萬葉家古学家なとゝいふをたてゝ此道にふけたる人ら何事も猶もこまかに考へ説めれどむかしみとらん知らず今の世にたてゝは皇國の学すはまさを歌よむことゝも盛にひらけもてきて足らすめと無きまでにと見ゆるは文のうつれの世にも類あらしとぞおぼゆるかしみつけそ少し物の心をしりそめてよりとくや人はいはゆる大方歌よまぬ者もなく萬葉源氏なとのえうしもまなべは人とは即國學者和学者なと目けらるゝ事になれるも

此道の弊(ツヒエ)といふべし。それらの類をいはゆる詞章の習者
證の学まで實(マコト)にも皇國学(ミクニマネビ)の師(オヤ)といふべからず。眞實(マコト)
の皇國学とはかゝるよしなれども我國の道を説く道より
くらべ明(アキラ)めたる人をこそ皇國学者ともいふべきなれ。
ちかきむかし水戸の潜鋒栗山などいふ京師(ミヤコ)に
ありしなど保建大記を著して彈正尹八條親王に
奉りしときより三宅觀瀾なども中興鑑言をあらはして
さればこの二書(フタツフミ)をよくよみて中興鑑言は僅に
南北朝の間のことをいへるなれど誠に道の本ともいふ所
を詳(ツバラ)に論(アゲツラ)ひていとも正しき金言(マコト)なりともいふべきなれば此

を得て学ばん人我をよむに漏る事有べから
ず。されば歌よみをもよまむと思ふ人も常に手習(タナラ)し讀
るは紀書なりとしても此二人のめしはなれども眞實(マコト)
の皇國学の師(ビ)といふべきにはあらざるなり。
考證学も其益あることなれども又無益なるもあ
り。譬(タトハ)ば枕詞に久堅の天といふは舊説に如字(モジノゴトク)に
天長地久などの意にて久しく堅きをいふ由(ヨシ)加茂眞
淵が冠辭考にも續日本後紀の興福寺の僧が
長歌に瓠葛天能梯建(ヒサカタノアマノハシダテ)と書るに依て天はまろきに
虚(ウツロ)なれば瓠(ヒサゴ)の形(カタ)といへることと説(ト)るを荒木田久老が

萬葉考槻落葉などハ久堅ハ假字にて空を日刺方なるべし刺とハ日の御光のさしわたりやきますをいふことにて茜刺の刺に同じ方とは彼方なりといへり又眞淵も是に此類を枕詞といへるやうにいへるハ無き名なり是ハ句の頭に置辭なれハ冠辭といふべしといへり又歌枕といふことを僧契沖が勝地吐懐編の序にも和歌の名所あるハ枕あるごとし枕によりて歌を結び名所によりて佳句あり故に枕の名あるに本づきしなるべしと云ひ本居宣長が玉勝間にも凡枕といふものハすべて物のうへにて間にあつるも

の所をさしていふ物なり何にても枕といふべし名所をいふ枕といふも一句の言葉のうへにて明らかに所におきし此名なるもとより是等の説どもよろしからねども其ハ久堅ハ天の枕詞ぞ枕とは名所をいふ事といふハ得ずらぬ故にはよしはいふともあれ然のミ考へ明らめずとも歌よむことの害となるべきにもあらず久堅といふ言の意を考へ得ずとも人の歌も久堅とハ唯天の枕詞とのミ心得たる人の歌もよく讀まじくハあらぬ差別もあるべしよしされバ是等はみな證の學の善悪なることも是なれ字多も實に此國の言葉の文章なり其由ハまづ神

代に伊弉諾伊弉冊命の淡路洲を胞として邇大日
本豊秋津洲を生給ひてそれよりよゝ代の事にして
それより後皇孫尊の日向に天降ましゝまでの年月も是亦
遠く長きことにしてはかりそめなる代々を經まゝむとも知
られずさてその大日本豊秋洲の生れし時より皇孫尊の
天降ましゝまでの間既に人倫上下のわかち有て此國をう
しはき給へる神ありつらむ故素戔烏尊の天よりも
追やられて後も其御子ら次弟に相承て大己
貴神に至てぞ此下ッ國の主なりしに
ましけるに天より天穗日命を此國にくだして給ふ

然しめ給ふに此神の大國主神大己貴神の亦名也に媚附て三年まで
で復命申さゞりき故また天稚彦命を降し給ふに此神も
亦顯國玉神これも大己貴神の亦名也の女下照姫を妻として住て遂に
復命申さゞりきとかやこれまた此大己貴神の勢猛にして此
下ッ國の主なる事を知るべしされどこそ大國主とも申すなれ
さて八千矛神これも大己貴神の亦名なりの沼河比賣とは贈答の哥
下照姫の味耜高彦根神をあらはし申す哥豊玉姫の天
孫に奉れる歌などはみなすべて八雲の神詠よりは稍
後のものなれど國より此國に久しく讀來れる言の葉の文
あるはなきにしてよく思ふに千戈弓矢衣服器用品物

物産一つとして備はらざる物なきまでなりし神代より
以来殊の外久遠なるものとして奇くあやしく此
国なる事共など思ふめるは中にもしるしたる古事記
上巻日本書紀の神代巻などを熟視に國土山川
風雲雨露共あらゆる人情世態のさまから今此世と
異なるものなくして既に人あれば言あり言あれば言の
葉共文も必ずなきにあらざる理にて彼素戔烏尊共八雲
の神詠を此下つ国共風俗にならはせたまひましゝその
はじめなりとさればこそ宇多もをそなはり此国共ものなりと
知らるれ于此時には長くふるゝだに今もふるに伝はれるのみ云

て驚しおくべき要なる事は永言抄にいへり
萬葉集は我国の詩経にて古人の心言葉を知り且
は歌よむにも其趣きをも心得むには此書に及ぶものなけれ
ば読まずはあるべからざるものなれども古學者萬葉をさへい
ひつゝ能くそれと心得ず漫に萬葉めきたる詞を読ならへるは
極めて似げなきことなり凡詩にても歌にても時代によりてかはり
つきもてゆくは自然の勢なるをそれはなれて今よりむかしにならむは
拾古今集よりも已下新古今集までの八代集（八代集より已下も）
（やゝかはりゆけども得失なきが如し）なれど其中にても此ごろを優美にかよへるも
しられ詞をも用ひて目やすく読むべかりし事なれば（我国よりては風調なきもね）

ともふもの
ちなればなり
其中に自然と各々人の風ありて古朴なるも
花やかなるも其さまさまなれど皆よろしき然るからの加茂
縣居翁のミハ殊に古調にてまなびの人まで文章も讀
なしよく學ぶべきにはあらねど其萬葉学の弊みえの
新雑くさより後々の人のまた後世の調に似もつかぬ古調の
詞などをまじへて近く見るかたしき人の歌にもいやしきを
おぼゆるもの多くなり今江戸などよみの弊一般なるもの如し
すべて是等の論ありは伴蒿蹊が閑田耕筆にいへるおもむ
きに殊によくかなへるを就て見るべし又今学ぶに必ず萬葉家
ならずは非ず又二条冷泉家と云ふも非ずといはれど

やうなれば萬葉学より出てさて今の世の歌のさまがら
人のあやしともおもふまじとかまへたるから殊の外なる巧を用ひ
あやしく卑俗なる詞ともまじへよむ人ありともおぼゆるを
るはいかにもなつかしくまことなるに
凡歌よむ人は書をよみ書よむ人は歌をもよむべし
を拙くすとして大方學問と詠歌と二つなるものゝ如く思ひて
兼よろしからぬ人はすくなからずまたかたよりて其片方にのみ
論なるむに書よまぬ人の歌はいとよろしからぬもあるを
されど何とかくおもふにまたも學問せぬ人のよからぬなり
此よしはいはで讀書の多少はともかくも書物は讀むべき事

さて其書ハいかなる書をよむべきといふに歌集歌書ハさらなり八雲御抄、袋草子、無名抄などどれもよみをしるべしハ勿論なれども歌書のみを見るとて歌よみ手になるといふにハ限らねども洩すべからざる三部書舊事紀、古事記、日本書紀、六國史日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、文徳實録、三代實録、などをもよみなどして上古(イニシヘ)を

朝廷(ミカド)のはじまりも一ト通りハ心得おくべく延喜式、令義解、三代格(キヤク)、北山抄、西宮記、江家次第、それらの記録もよし明月記なども此物なども餘暇(イトマ)あらバ讀べくまた古今著聞集、十訓抄、愚管抄、古事談、今昔物語、宇治拾遺物語、江談抄、兼載雜談、徹書記物語、

後鳥院の御口傳などハ必ずよむべき書なり無名抄ハ俊頼と長明との心(チ)ある物なれバ此外の書をくらべしれバ學びゆくにハなれて各其人(〳〵)の才覺よりまなぶべき事なり文粹懐風藻などの類もよくよむべし物語なりハ竹取(タカトリ)物語ハ狭衣などの物語ことさらハよみ見てもはじめしれど文章よみよろしからぬものにハ非ず伊勢物語、清少納言などもまことに假字(カナ)がきのおやともいふべきものなれバ又三鏡の中に大鏡ことにすぐれてなるものなりふしぎなる紀事の體なりよむべし必ず此書を法と爲(ナス)べきなりとかの長明無名抄にも大鏡をほめていへり但し大鏡亦六

是ハ刀夷国の賊、筑紫へ乱妨のことをいへるに
新羅のみうどゝいふとあるは無識の沙汰也源氏物語ハ昔よりて
歌人などもあつかる書にて必ずよまでハえあるまじき物になれ得
さしけれ文のあやとなひ春秋のたとへ人の心の思へるさまなど
いひあらはせる文類ともなくめでたれど固より実なきこと
なる物語なれバ有職のかたに付てハ考とすべき事をすくな
く唯ねど事蹟にかけても更に無用なる物語なり然るに當時の
事をしる考へ知らむとて實事多く記せるもの有て源氏に並ぶ
べきものハ栄華物語ぞさとよく取るものはこそ栄華なるに
によりて見よ源氏をしらずとも事たるまじきものと思ふに来
女ならどのよく読みて誠にてあさんことを益あるべけれど但し栄華は
是ハ此物語を好む人のなしえされど紫女の才学ハ称むべし

赤染が作にあらず紫式部日記などをよまへ多きて
其ら名のさまなども物を集て後人の赤染にある程がかしの
ならしむとよくり此説ハ古人も安藤為章か紫家七論
に委し猶栄華なとは備前の湯浅元貞か常山筆餘
なとにも見えたりとおほせも保元平治物語、平家物語など
にめでたるれをなし是等ハ更に後世の軍記の類にあらず
按ずるに此方のつくり物語ハみな皆ならで小説といへ
ば小説のあまねはじまれるは趙宋仁宗の時久
しく世中ぞやるにのどかなりに付てめでたしれ物語など以
て心おかしきことせしよりなるよし七修類藁に見えたるを　小説宋巳

前にもあり 源氏物語ハ

一條天皇の御時なり宋ノ仁宗ノ少し前にてやゝのちなれバあれど猶同じ事なれば此方にも彼方にも小説の盛になりけるもあやしむべからず假字ノ文章はいつのころよりとも知られず或説に嵯峨天皇ノ御宇に始まりといへるは彼古今集序に依ていへる事なれども彼序も早く偽作なるものにて假字文ノあらはれし彼御宇に始まれる事ハ知べうもあらず今見に傳はる物にては貫之が大井川行幸序古今集序などぞ古き文章なるべしそれよりして我國にて物語といふ記ものも上りたりし代まで皆漢文をまねびつることまで今の假字文ハ無き故此方ノ言のまゝに書まく欲る時ハ漢字ノ音の此方ノ言に近きものを借て漢文の中に少しづゝまじへ書るものにして（古事記ニ久羅下那洲多陀用弊琉之時と云類）歌なども日本紀、古事記にありけるめり万葉集なども此例にて皆字音もて譯せし或詞書なども漢文にて有なりその時にもありけれどかくて假字ハ専らものするを紀、日本紀ならびに拾遺、延喜式ノ祝詞などのごときは漢文をまじへぬ所を法とすべきは本居宣長がいへる如くなりさればよみときかむ人もいふまでも此方ノ古書をよまでハ叶ふまじきことを知るべし

鎌倉殿始て日本國總追捕使となり給ひしより職なき者を何
事も武弁の家より世の中をすべしらるゝ事になりしよ
り已來(コノカタ)今に至るまで同じさまなれど昔の世とも一かはりて
官名役名なども昔の聞なれぬが多くなりて無下に
なま人などの昔に似たる事がら借りなどを強てふるめかし
むとするはいと僻言(ヒガコト)ぞ是ハ自然の勢ひにて時の制度に随ひて
移りかはりぬるものなれば官名稱呼も地名などもあらためて
すこしもへだつる事なし新井氏が滄泊先生に答(フル)の書村田春海
が時文摘紙などにいへるが如しされば文武弁より世の中さ
だまりての上は其世に在し人々が書る文章なども亦そ

見て今の世に用ひらるゝ事なりとはいへど覚えおくべき事なれその
文章を家々が西山公の扶桑拾葉集などをはじめ多くは
古代の事をのみしるせしものなれど後々の文章を實
の假字の文章とするものの體なるべしといへるはまた
それをよくよむまで取捨あるべき事なれば、やすからぬ
因に云、佐々十竹ぬしの説に西土明代に宋景濂が元史を
撰ぶ時景濂などの文章家の元人(ケンヒト)の官名などに其
某不花帖木兒などいふをむつかしとて極めて好ましから
ざれば思ひつくもあらはれ時の制度稱呼なれば止ることを得
ずそのまゝに記してそのまゝにすべしといへり識者の事ぞ滿

清ミて書べきをしらぬ名目有て地名
などハ殊に讀得(ヨミエ)がたきもあれバおもしろからぬ所
もあれど其は筆紙ともに人のなげきなれバほしいまゝにするも
止(ヤム)ことを得ざるなりに書(カキ)しまゝなれバ今此方ハ
ことを書(カ)むかも今学生ハ手おのづから得べき事く
近き世の人の作れる文や歌文木下長嘯子、細川幽齋などよ
り契沖、眞淵、宣長ぬしなどのをばよく讀みおぼえてくれ
その今学生ハ今此まなびを手がけもちてそのいまだ
るもを能くあつめよむともそのわけ又依て物の
むる儀に從ひ作るにもまたハ是にならひて

眞淵の文章をよくよみて用捨あることをしりて譬(タトハバ)江戸をよみや
こと云へる所などを用ひざる事ハ必ず日本にてハ今の平安京
より外に宮所(ミヤコ)と云ふ地(トコロ)ハ無きことを論長ぜれバ此事ハ心得ず
本居宣長が著述ハ皆有用のものにて中にも古事記傳の直日(ナホビ)ノ
靈(ミタマ)と馭戎慨言、鉗狂人、葛花などは詠歌作文のためには
あらで皆皇國(ミクニ)の道をあきらかにして説(トキ)あらはしたる書なれバ早く
讀べきなり 但し殊の外に他國聖人の道をあしく云ひなしたれバ我が神聖の道にも背くところあり下ワタリに云たるべき事あるも必ずえらぶ人ありともあれど讀べし 又歌書にハ詞の玉の緒、新古今集美濃家裏草
菴集玉箒、その部ハ必ず常に手習(タナラ)し讀べき書なれバ此の
よりて人の才智をまして進歩ちからしむるもの此書ども(ミク)ハ

あらじ　但し美濃の宗匠ハあしきまゝならずよりて一篇もあれども其解くらき味あることも誰もしらねば及ばずさむとをとらんてぞぐし
北村季吟もをとらぬしれし学者之此人の著述をみてすら源
氏物語の湖月抄、清少納言が春曙抄、伊勢物語の拾穂
抄、ちかきひとびとめでたき抄物くにとて己(オノ)が私の説をいはず古説を
まで丁寧にのせたるものし引書ハ皇国のはさらなり漢籍
も佛書も手ひろくひけれハ引わたして證としいれハ極(キハメ)て重宝
なるにて大きく人の用をなし今もなほ世にひろく行ハれ廃(スタ)れ
ざるなれども此をばかす但し万葉集の拾穂抄のミハ取るにたらず
備はりたるも一人(イチニム)にて求むることなれバ誰とてもその好む一つ
ならじをもとしてハ学びて弊(ツヒエ)をなす事なくもの自然(オノヅカラ)の理(コトワリ)なるべし

ひとど拘慎べきことどもあり凡漢籍をよむもの漫(ミダリ)に漢(カラ)ぶり
のことよろしとし得て美き事に思ひより何とかして唐服を著(キ)ま
ほしく思ひ歌よむとてハ雲上人(ノウヘビト)に似まほしく思ふも極(メ)て僻
事(ヒガコト)なり今世嘗ておもへらく位ある人ハ其官服をも著べく無位
の人ハ布衣素袍上下羽織袴などおのおのそのあるべき程の服をば
著(ツケ)てありても今日の制度にはかなはぬにもあらずと思ふなり
然(サ)る故官位なきハ其人のほどに此弊をとゞめ古事記傳に
其姓(カバネ)を署(シル)すとて朝臣(アリミ)の制ありて無位の人ハ許されぬ弥ハ強に
て平安曽美(アリミ)とかかれ又其画像なども披風とかなりし後(ウシロ)に
或王人(オホミヤビト)の朝服の裾(キヨ)とかくまで如きも絹にて切りし文或人ハ倍(ヨ)

に矢立とて筆墨を入るゝ具を笏の形に擬造して
身に添へ披風をきて彼笏の矢立を上よりさし
ぬきなどするさまおかしき事なりとや
すべてよきは衣服も皆制ありて位によりて品かはり色定め
ありて私に異様なるものを製して身にまとひ著るものはなく
ただ今有るものは近き頃にて此は已が国にて作りてあはせたる服にして
賤しき者の旅衣なるを夷の形に似たる防主合羽といふも
のを襲ひそめしものか合羽とも（合羽は音を借りたるなるべし）西洋の法衣
なるものをもて擬て此方にて雨衣を製りしなれば其名
も蕃名のまゝに「カッパ」と呼ぶ（カッパのことは白石の采覧異言その外の書にも見ゆ）さて

今はよき人も此「カッパ」といふ雨衣をきならずして著ることなれ
ば其実をしらずしてかく名くるも好事家などは阿蘭陀の
薬法などを好みて用ひ餘りて私に彼国の服を
つけ彼国の正月元日を祝ふとて集りて飲みする人もありとや
全く戯なるべけれどいかなる事ぞや此等は胡狄の正朔
を奉ずるに似たり安倍仲麿の論に云
元正帝之遣満也欲便其學業成而為國家之用
耳而満以累世廷臣飽沾朝恩一旦棄父母之郷
委身外國之主變其章服更其姓名不謂之不忠
不義而可乎今有人喜敢獵素養一健夫偶聞韃

人善獵遣健夫學之健夫在韃數年日從事於獵其技之精殆過韃人也健夫遂畱韃地受官食祿則以爲義乎將以爲不義乎滿之畱唐何以異於是（文苑雜纂）とみて彼は某なれは人の心と此論をもて人此心とかくの識無識にかゝはらすかくの如し天壤のちかひ之

歌なとよむ人は漢籍なとも入らぬものゝやうにおもへとも人みな智をまし見識の開くるは漢籍をよくするに及ものなし されは必す儒者とならすとも暇あるときは何にても漢籍をつとめ読へきことなれとも四書五経なとは幼時によみおくへし人もあり史記左傳なとも少しはよむ人はおのつから事ものわかりよく事もなれと好まさる人は四書五経の素読はかり止むとしきわさにてよむ人すくなけれは世中の盛衰をもしらしめ知らせたきあるへけれはしめて温公通鑑なとは読て益ある書なれは人もよみ給ふへきもの也

神武天皇を豊秋津洲の開祖

崇神天皇を志貴嶋の開祖

天智天皇を日本國の開祖なりと幽谷藤田公羽をいはれしを説めはさらにあらためておほえつけし詳しく之を委しくしたらぬともいふ長くかはらさりしなれはなり

近き比まてもあるを堀河兩度百首の風を好て其中より

ふるき歌に似せてよみたるにもあらずかくしいづれとも彼百
首もよろしからぬもかのさまとも多かれど取べきもあらずをさく
初学の人の見るもまた得がたきことなるか彼中にもあらむ
今の風のうたとなりて詠たらばよみ歌の拙くそのうちの歌
おもしろき調のみにてさらにせむべきこなきにあらふ
風をもよみなしたる人も多くは物知らぬ人のうへ
よろしきと思へるもなかなかにて今世彼両度百首作に就て
よろしきを撰みなして堀河百首撰を抄出しつけたる一冊あり
近き比世に行はるゝ紅塵集なども其よろしきをあげつらひたる
まぎらはしきにもあれど是亦初学の人の心えたき得あ

ずべきことは文苑玉露にのせものつきもよしあつめし假字文をも
まねぶむ人は常によみ見て益ある書なり
皇國學とても前よりかへるにあらむ家國の神よりの道より来へ
あるなものの事まで伝れに付ての古語をも解釈古歌をも味へ
よみならひ歌よみならひそ古のなかにも考へ明らむるに
便あしからずおのづから老説の学にも落て其老説の
うち専務の由にまかはりてもいふ非ならずとも一概に老説も
捨べきにあらずからぶくはなして連音を知らずて何ぞれとも不
自由なるに是をもつらぬきて考へおかしくもなるなり此五十
連音といふは佛家の悉曇よりあつかひなれば西南

齊ノ周顒が四聲切韻を作れるよしいへるも此人佛理によりた
ふかりて事物紀原に切字本出ニ於西域ニとあるにてぞ知ら
るゝなりもとの書なれば見るべし 此五十連音を皇國にて神代よりて傳はれりとて羽倉東滿加茂眞淵などいへるはいかで非なるを
其書とは涅槃經の文字品あるは悉曇字記、明ノ張凡夫が說文長箋、清ノ邵長衡が古今韻畧な
どに見えたるべし皇朝にて韻書のはじめは江談抄に東宮
切韻は菅家主刑部尚書集メテ十三家ノ切韻ヲ爲ス一家ト之
作者とあるやらむはじめなるらむ其他は安然が悉曇藏近くは
文雄が磨光韻鏡また契沖が和字正濫、萬葉抄の中の
雜說、宣長が漢字三音考などもみるべし康熙字典序

又に康熙帝が天地元音の說、元史釋老傳に帝師八思巴が蒙古新字を作れる故事までも参考に備ふべし 梁書に沈約が四聲譜の事梁代に切韻さかりに行はれしことなどいへども長ければ皆もらしつ 悉曇字記抄よりてものし
北畠准后が神皇正統記は早く見るべき書なり三種
神器の事世に現はれましし由来をすこしも此書なくて
はかなくおぼえむにもかくて後のほどに誠にありがたき
書なるをさらにこそ此御方才智識量世にすぐれさせたまふものから
知られけれ皇國ぶりの事は正統記と直日靈をよみて早
く心得べきことなりけり 但し直日靈などをよむも
まづ取捨の用心あるべし 又芳野にて官位
職掌が詳ならざるをもて此御方常陸の關城にありし頃

書一つもあらで職原抄を撰ばせ給ひし芳野の
皇居に奉るを始めてもなほ多かる事なりしかば又正統記を常
陸にて書かれたるを水戸の六反田村六蔵寺に應永四年の古
寫本ありて正統記あるをその親房卿の奥書あるを云此記者
去延元四年秋為示或童蒙所馳老筆也旅宿之間
不蓄一巻之書纔尋得最略皇代記任彼篇目粗勒
子細了とあり旅宿の間とも關城にありし時をいふなり
按ずるに後漢光武帝あらはれて天下を得たる時に王莽が
末より世の中乱れしをむかしの朝廷の古事などを知れ
る人も無かりしに河南の杜虎覇の明習故事收録遺文

條奏前世善政法度施行之とあるに似たるなり
今江戸にかくれなき手かきなりし清水濱臣もそのかみを
謝ぜんとありしを死たる時に正木千幹大寂菴立綱ともに
ありしをさそむかしの人とすれてる今は僅に畠山常緣を本
閒游清とのこえて此のほかも手かきの名人とさへ世れば此外に
も彼これとよききもあれげなれど今世に知る人まれなれ
高田與清も稱せしなり江戸まで名人の中にても書
むかしより何事もきしかくなければ人をなるて凡讀
まさも必ず書をも讀べきなりとおもはれども人なまで
なる書をも數多讀みれども自から文の書よき事は

拙(ギ)あるをいはず学問と藝(ワザ)とをいはゞ別(ベチ)の物のやうなれど
も書を見て損をもしと知べし又儒者などは詩文を作る
ことのみを書生(モノマネビ)の役(ヤリ)のやうに得て詩文さへ作ればよくて事
足(タ)りぬと思ふ人もあれど聊(イサカ)見識もなくて作りたりとも
詩文は何の用をか為(ナ)さむ才學識の三つを備へざれば實には
用をなさざることぞ史家に此を三長といひて
異稱日本傳などいへる書まで皇國の学(ビ)する人はのぞかずし
てよまれて有べくもあるまじきことを見るに松下見林が學問の
程も知られてなほ疑(リ)はる人は今(ノ)世の人などの名利(ミヤウリ)のためには
あらず無益(ムヤク)の愚書(シレブミ)の類(ヒ)に非ず三代實録をも板に彫(エ)れば

に校正を加へたるも此人なりきて異稱日本傳のみにて其
板火に焼(ヤカ)れてなくなりぬることを歎かしくもおもへるなり
鈴屋の宇比山ぶみにや見えたるにも凡何書(ツ)にても注釋を
よむとものせし然(シカ)る時はそのめぐし学問の進むことは
いふ事なし然(シカ)れば之(レ)なりに付て我が目(メ)を過(スギ)る程の書をとてまり必
ず抄録(カキヌキ)すべきなり年月に従(ヘ)て怠(タル)りなく何かにつけて其抄録(カキヌキ)せ
るものゝ數つもると行に随て此方(コナタ)の識も自然(オノヅカラ)にまさりて目
をとむべき所なども見えて其力強くなりゆくことはなり
又なにがしの戯(こ)の名子弟の物まなびを読みなば必ず一(ツ)つの益
を得ざることなし名をのなさずましてもわがあるべき書にて

讀て益あることいふまでもなし但し讀ことを好まざる人は
なにごともなすべからず又讀書を好むとても所謂(イハユル)ふみなかし
まなび用をなさざればかへりて人の生れ得たる性(サガ)の然(シカ)る事
あるをもよわくしるも學で約(ツヾマヤカ)なるところをおもふべし
萬葉集の注は八雲御抄に萬葉集抄、五巻抄、貫之撰 五巻抄は僞作なるよしいへり
之は其抄不知撰者とあるはそれぞれしめなるべし
古人さやく(?)顯昭が袖中抄等にまれにひきたる萬葉抄と
いふべく彼二十巻抄なるものは契沖法師が説あるべし
又萬葉集をば片假字(カタカナ)つけてよむことも
天暦の御字に昭陽舍(シヤウヤウシヤ)にて梨壺(ナシツボ)の五人 大中臣能宣、清原元輔、坂上望城、源順、紀時文

に詔(ミコトノリ)して和點を加へしめ給ふに 袋草子八雲御抄 始まる是を古點
といふ其後に法成寺入道關白太政大臣、大江佐國、藤原
孝言、權中納言匡房、源國信、藤原基俊、等あまたの點を
加へしは是を次點といふ其後
後嵯峨院御字に權律師仙覺が點を新点といふ 順の和点の事は順家集源氏系図などにも見ゆ匡房卿の事は江談抄にも見えたり○古点次点新点といふことは仙覺が文永三年八月十八日の萬葉集の奥書にみえて由阿が詞林采葉抄などにも見えたり
今傳はる所の萬葉集は仙覺が本なり 徹書記物語にも仙覚が注釈といふあり
これより後由阿法師その仙覺が説をとりて人に教へし
よりて萬葉集の秘説世にひろまりけるとなん 落書露顯 かくてのちは
西山公釋萬葉集を 此書初の名萬葉集纂注といへりよりて契沖碑陰にもかけり あれど

めりしせなども有りて傳ふるづらも多くなりし又難波の契冲阿闍梨此学にふかゝりけるを或時きこしめして何くれと問ひ物しけるにこたへて釋萬葉集并に首巻と凡例とをかきて奉りしを安藤為章を御使にて清水谷大納言殿に就てよしあし定めらせ給ひしかバ猶ひかず殊に古今に雙ぶものなき注釋と萬葉此傳ふ水戸家よりもまたしとてやがて靈元太上皇へ奉られければ深く叡感ましまして末代までの寶なりと皆うちかへしくゝよせおはし給ふとなんきこえし上皇にも御筆を加へさせ給ひ亜相にも其事を助けたまひきせ給ひたりなど釋萬葉紀原とあるを見るに北村季吟が萬葉拾穂抄

賀茂真淵が萬葉考、荒木田久老が萬葉考槻乃落葉、橘千蔭が萬葉畧解、本居宣長が玉の小琴などを始めとしあれども猶 西山公をはじめとして萬葉学の中興の祖と申すべくなるべし。近き世に皇國学の盛になりしも此君の恩頼之(ミタマノフユ)

漢土(カラクニ)の人のつける叢書随筆の類をも時々よむべきなり。思ひの外に益を得ることすくなからず。其書といふは元陶九成が輟耕録、明楊升菴が丹鉛總録、張鼎が琅邪代醉編、謝肇淛が五雑俎、明の遺民顧炎武が日知録、清王士禛が池北偶談、香祖筆記、趙吉士が寄園寄所寄、それ此酉陽雑俎、容齋随筆、如是我聞の類なりて数ふるにはすべて

外の書をみるにハ此書なりよむに比てハけしからぬあやまりなれバ
益ことあらず見とつひやしに似たれどもかくるかみをよみ得られ
たる事によりて宇内のちなる事にあたりて淵鑑類函ハ萬に便よし
又按に新井白石の采覧異言、亀井道済がある書ハ外には
環海異聞、華夷變態、華夷通商考、長崎夜話草、崎陽
雜記、萬國新話、泰西輿地圖說、この類をよむべし彼方
まてハ全浙兵制、武備志、紀効新書、聖朝破邪集、西域聞
見録などを按じかへし付て読なる書名に考ふべし
てもと思ふにあらはれども多くの人ハ憚る所あれバ皆漏しく
ることも人の才覚に依てハいかなる書にも求め得て讀

むことハいふもおよバざることなりける歟
按ずるに明末に至り西邊の浪人なる民など數浙江など
へ行て侵し掠ることを業とせしを明人ハ至り
朝廷よりかのめくらなりしにかわりそれを倭寇倭奴
などと名づけて甚く畏き且倭ハ猖獗なりなどあしく思ひ
しかるをさる明の清にほろぼされむとしける時なる舜水朱
子瑜といへる人恢復の志ありて来朝せしが長崎
に来り居てのちもまた水戸より小宅生順を遣ハされて舜
水と筆語せしときも此事を辯解て我邦を倭奴など云
ハしめざりしことなり舜水も母し明天子再び

恢復の業なりしも得ざる此事をも解べしと答へつれど明
らかならぬことどもなきにしもあらねば遺憾をのこしぬさて此筆
語も舜水文集にのせられたるを彼文集清國へも渡さ
れたれば清人もこれをよみてや知りけむ文人のあら
はれても聞たるにや臺灣志の附録日本の條下に其
賊民相率駕舟寇沿海閩粵以為患國朝定鼎以
來德威遠播其上將軍約法嚴禁寸板不得下水
海邊烽火永息焉とあるは德威遠播なりとて彼が
例の誇りたる詞なれども今に至て倭奴などいはれし惡名の
雪がれて沈ゆるしたることかはやられぬ　上將軍の

あらさ　莫府なりしてや奉れるを説鈴に徐岳が見聞録
に國雖有王專政者為將軍三傌音馬とあるて　將軍
様の譯語をあぐ又按るに西土の人を皇國の尊まるとも
知られて唐書にも粟田朝臣眞人の進賢冠をきたるさ
まを賞美し王維が秘書晁監が日本にかへる送序に
晁監も海東國日本為大服聖人之訓有君子之風
仲麻呂正朔本乎夏時衣裳同乎漢制などもほめたり王維
集なるを然るも彼も自からも中夏と称て尊大なり来れる
せるて他国をそおとしめいひならひなれ得るからる香祖筆
記に　關白豊臣公の書をほめたる所に鱗介之族乃

能好古如此と云天明七年ニ清人の長崎唐人屋敷ニ
立たる観音堂碑記といふものニ皇朝の事を椎髻文身
之俗と記したるを恥べきものとて此碑今ハおしこぼし
てあるとぞ猶外にもかゝる事ありしとぞおぼゆる
荷田在満が大嘗会便蒙をよまゝほしきものゝすりとりて下さる
ハ事すみぬべし同人の令辨是非よくかゝる事蒼生子が家
集杉のしづえなどよまむもあやしからずとてはよろしからぬ心
して見るべし千蔭が文枝直ハ歌にあらずしておもしろからざる
がらなしされど枝直が歌のきこえぬにてはなし
書を著すとも各其人の長ずる所ありて皇国学の方

に取りてみれば或ハ上代の事蹟を考へ著す人あり或ハ有職
の事に力を入れて官職服色故実などを考へ著す人あり或ハ
系図古文書古記録などに委しくて知られたる人の事
業などを考へ著す人もありて或ハ古言古語を解に妙を得
て言葉の原をうかゞひときわむる人あり或ハよみうたに精
くしてそのみちをならひえたる人もあり或ハまた文章に精くして
それが論を著す人もあり或ハ文何もえらばず物するもありて
種々なれども何とまれ考へ著す人はそれぞれの業ありて
各用ある事なれば此のわざよしあしをあしとも定めがた
しかれど近比出くる書どもをみるにえらびなきものにて才学も

無きかりし人どもは名をほこりて穿鑿附會の說をな
さんとしてあらぬ非ども（ヒガコト）をいひたてゝ固より無用なるを更
にも好にかへて人の惑を引おこして害となる事どもあるを
やうに如此（ジカ）の書をなせしもこの者を覚ゆるものぞちまたにみてれしか
耳ぬ說（セチ）どもをとりてむよるに何の本事蹟をのせて實（マコト）あ
るものをあらはさむとてこそ此文詞は拙けれども後世に傳へて
を用ある事がらは又かゝる人のためにて此限りに非ず何をかいはんとて
も皆人の用をなすべき試みむとての人の為なり伊藤東涯の
制度通、用字格、秉燭談、名物六帖、の類、新井白石の東雅、
藩翰譜、本朝軍器考、讀史餘論、同文通考、南嶋志、蝦

夷志、采覽異言、その外の著述ども皆有用の書なるをや
但し古史通のごとく信がたき說あるはされども猶わづかにして實用（ジチヨウ）ならむとお
もへりはやくより華文浮詞、臆說愚論を取るべくもあらずされば文
古人のふみにも今人のふみにもなかなかにあまりて書（フミ）作ると
き唯ことばやさしくかなはずさるなみ才學をかゝめるにて功
をなし易（ヤス）く又今人に似つかはしからねばとらはれこそ
よろしからんと讀しよれどもさまでも取捨の用心あるべし
儒者と學（ブ）人の假字（カナ）文をみるにつてよきは雨森芳洲なり其
外白石などもよくさとるを見えしかど、此外に大
方儒者の假字文にては言をも知らず詞のつかひざま

も知らぬ物を拙く事によりてハ詞のみ得らるれバそれまでなるを猶

いはでもあらぬを聞しめしなほさるゝものもありけれバ文にいひおきたれど

されバこそ芽の假字をも常にまぢへてよめるをも儒者などハ

は国よりて学び得ぬるにもあれバさもあらめど笑ふべきことなるを

皇国人もこの国の文辞をつけてハむつかしくて然(サ)も定(サダメ)て

あるまじきわざ少しも心得たるものハしか思ふべきをみづからさ

ほめてそのうへにもおもしろくめでたげなるよ

菅贈太政大臣の詩を唐人(タウヒト)の見て白居易が風に似たりと

てほめあへりき（菅家文草）近くハ白石の詩集を琉球人の清国

に傳へやりて清人などもほめてあげたりき（鄭任鑰が白石餘稿序　室鳩巣が白石

餘稿序）これらハ殊に其達者なるものなれバさもあるべけれど

ふむもとさよりてなき人の長崎へもてやりて詩集文集などを

皆その序を清人に求めて強て彼がことばをもつてほめら

れたる何の益かあらむ抑ゆゑよりて此方の詩文語は拙き

詩文を我(ワレ)ものほめむとても本還りて清人のもとめにハまれ

なぐさみ見すめしが此国の人も地(トコロ)のことなるにてよれ

さとれる殊なる事ならし

むかしも此方の人の文集などを漢人の序をこひしことは

律絶海が語録序、釋義堂が空華集歌、夢想國師

の碑銘なども識明人のをこひし事なりそのゝち八蕉堅稿

空華集、宋景濂が護法録にのせたるや
なき桂川ぬしの志をもちて大和魂忘れぬ人は八洲のほかの
国々のまでもおしよすべきにはあらぬ故かの横文字
なとをやはらぐるとてかゝるもさることながらしかれ
ど和蘭方人の譯せる書に就てはなほぞ便よきは彼の
大方の蘭学者といふもの無識の人多かれど 近ころのものは莫臥
爾といふは胡国のことを大莫臥爾国といへる所あるは類なき無識之 其譯をも書も或は薬方證好
なとのもみなくてはなつて無用に屬するも其中に邑満の山
村昌永が采覧異言増譯なとはてる用の書之の人華
なくして早く身まかりけるこそをしむべきなり 又桂川甫周

といふ名も魯西亜の莫斯哥国なとまでも婦人女子まで知り
てあるぞと欽 桂川已下幸大夫上覧の記なる 彼あやしからぬに知られるとてたう
まうしむべきなりし称と甫周名をなさることいふ名なかりしこ
挟るに西洋横もじのさたぬかしき史記及前漢書西域
傳安息國の条に書革旁行爲書記師古注今西方
胡國及南方林邑之徒書皆横行不直下也革謂
皮之不柔者とかへるとも岳父幽谷翁 前田次郎左エ門一正字子定
いひけるかし
歌よむに初学の人のよむに和歌八重垣集、題林愚抄、濵
のまさご、近くは此より芳雲集などもさのみ害もなきもの

されバ先よき哥の類と明題集、新題林やうのものなどハ中々に
いと巧におもしろきもあれど、さるさまハ歌よみならず鄙倍なるも
およそ初学の人の手本ふまねびてならふハいつもかくの如くなるも
みな得てもハいと宜しからず歌も猶おとりぬべき也けれ
古人のかの仮字の文章すくなくて貫之已後よ漢文のみなりしにて
文選の四六文などいはゆる對句などありておもしろく
みゆるもあり宋四六選などいふもの、もや散文に似たる有歐蘇なれバ今の文にあらむよ
も漢文を屬る人心得なくてはかなふまじ、すなれど漢文ハ
かならずの書も數多く限もなくすゑて只是一ツの大事なれ
さればふみをもよみ漢文をもかくとならずすとも至りがたし

されバ唯このものがたりを得ずて古文真寶、文章軌範など
とを見て起伏頓挫照應なんど論紀事など其體をも心
得おくべき也さて文體明辨などいふもの又文則などいふ一冊など
もよろし文にも極めて益ある書なれバ是をよむべきなり、さて
此経板に彫れる唐宋八家文讀本ハ座右におくべき書也
書籍などハ其の用にて此の所のものとなるべしと定めおき
されぬ物などハ手近き書ハ常に備へおきてハ事なく
なる故他にかりて尤も不自由するものあることなれバも
人の書を借りても讀終りなバ速にかへすべし
故に中庸に施於已而不願亦勿施於人とある業平朝臣

みだりに今くさしくあざける人なりとも、さる人ハかならず同
じやうなる」是皆おのが身ハ畢竟して他をも知れども
其ハたゞ云ふのミ。著書もおぼつかなき事實に拘まるゝなるを書
おけども我が世にて学びをすとも後の用をなさず。小右記、中
右記、玉海、百錬抄、園太暦などの文ハ極て拙なれども實事な
るゆゑ、其の後の世にあつて當時のさまを知るに證となる。東鑑など
ども拙き文章にて、志ある才学ある人の見る物となりぬれバ
清人なれども所謂不賢者識其小而已（朱竹宅文集）などいはれて識
らるゝなれども又なくて叶はぬ書なりけれバ、おもしろく文日本書紀
を修められる手段ハ謙にあつてかゝる事ならなむ

日本紀にハあられもなき諱てかゝぬのわかる事なりとても
天武天皇の御時に白鳳朱鳥の年號ありしを
持統天皇の御宇に年號の無きをしてかゝる故にそ
年號を立給ひけるかも那須國造碑に唐の武后が永昌
の年號を用ひられしも知れこと此事ハ紀にもなきわざなれバ
かゝる由といふことは知られざれども歟なきにあらず又
大友皇子の天皇の月嗣ありし事を水鏡、大鏡、等に
正しく見えたるも書紀にはいはれざるを西山公の英斷にて
初めて大日本史にも此
皇子を帝紀に入れて

神功皇后紀を書紀に摂政元年とかけるに依て后妃傳に
のせ神器のある所によりて
南朝を正統とはし給へるなどぞ誅にあたりける御事に
て、まことに此大和ごゝろ穂の国のすがたをもしるべきものなる大和魂
まなびたる、さるを学文よみ、文の古き言葉などばかりをときて解
ことばのみ皇國學の業と心得たるわざをしもみするにも和学
者国學者などいふもの知らぬ人のいふことなるべし
古人時にあはずして功ならず其道ならで時にあはされ
ざるのみならで其才をのみとどるもまされて時にあひて
ばかりはならざらんにもちからおよばず書よまむ

かゝる文の業なれば才をのみつとむるばかりなるべ
き道をのべ明さむともおもはれぬべきことにはなむありけ
る故よのつねにものかく業をも世人皆のわざとする
あらねどもかくもはしきをそれなりぬる皇國の書をよむにつけ
てもあはれおもひぬる此世の業のおもむきを思ひかたる
まゝにそこはかとなく書記しおきて今世にまなびする物
しりびとまねびにもとりなさむもみ心にとめたまはむとぞあるなり
去年のくれよりはじめてかきつゞけてあり
文政八年といふ年の十一月十五日水戸の殿人吉田令世

聲文私言終

聲文私言跋

大八洲之文藻郁〻繁盛可謂備矣今人欲溯流探原以有所述作復亦何加焉然人所嗜好各有不能自已者余性愛書且好酒男今世嗜文藻喰其醨餽恐幼學或務耳食失其旨近著一書命日聲文私言余未有咀嚼以尋其味但其所嗜好而不能自

已。猶余之於書與酒則其心之所酖。隨而寫之。亦猶余之面紅耳熱揮毫落紙之日。其豈得已矣哉若其言之有醇醨大方君子幸恕爲

文政拾年丁亥暮春聾愚菴老人題

4 年 2 月